

「第 6 回市民発！介護なんでも文化祭」開催

“市民の目線で「介護」を伝えよう！”との発想から始まった「介護なんでも文化祭」が 10 月 17 日(日)、上智大学四谷キャンパス・上智社会福祉専門学校で開催された。

6 年目を迎え、プログラムにはさまざまな工夫が見える。第 1 会場の「はてなミュージアム」。介護に関する、介護に役立つ情報発信のブースが体育館いっばいに広がり、介護の先輩たちがミュージアムツアーの案内役を務めてくれる。第 2 会場は「専門医や臨床心理士による個別相談コーナー」。こちらは認知症やこころのケアについて宮永和夫氏(ゆきぐに大和病院院長)をはじめとした専門家が個別相談に応じていた。第 3 会場は「集おう！介護の学び舎」。“認知症のひろば”“介護を学ぶ学生のひろば”“ケアする人のケアひろば”など教室ごとに分かれて交流の場が設けられ、認知症の家族を介護した経験から得た対処法を寸劇「こんなときどうしたらいいの？」で演じた会場は、認知症ケアの大変さを聡明に乗り越え、出会いの楽しさを存分に楽しむ明るさに満ちていた。

今回初参加の日本専門看護師協議会は会場入口の横に出展し、専門看護師の活動を知らせようと積極的にチラシを配布し、参加者からの相談に応じた。専門看護師による“がんについての Q & A”など 4 つのミニレクチャーにも参加者が集まった。

“進化しつづける「介護なんでも文化祭」は、みんなが支える「介護の市民博覧会」である”と参加を呼びかけた NPO 法人介護者サポートネットワークセンター・アラジン理事長の牧野史子さんは、「年に一度の開催であるにもかかわらず参加者は年々増えて、ここでの出



会場の上智大学四谷キャンパスは JR 四ツ谷駅すぐ

会いが日常的につながり、なんでも文化祭が意味することの重要性を感じます」と話す。

ここに来れば話を聞いてもらえる、情報が得られる。介護を重く背負い込まないで、集い・出会い・つながる場として定着し、「どうしようかなと思ったけど、やっぱり来てよかった！」という参加者の笑顔が印象的だった。

事務局による当日のアンケート集計結果のまとめによると、来場者は約 800 人、年齢は 40～50 歳代が中心。「今年の傾向は 30 歳代が増えており、若い層にも関心が高まってきている。出展者側にも若い層の積極的な関わりが増えていることによる効果もあるのではないか」とある。広がり期待したい。

●事務局：NPO 法人介護者サポートネットワークセンター・アラジン

TEL. 03-5368-1955 Fax. 03-5368-1956

<http://www12.ocn.ne.jp/~arajin/>